

内村鑑三における信仰と愛との関連

— 個人の信仰、隣人愛から社会性へ —

岩野 祐介

はじめに

内村鑑三は周知のごとく、無教会主義キリスト教の創始者である。この無教会という形態に内村が至った直接的な理由としては、既成教派に対する批判、不敬事件とその結果といった要素が考えられる。これらが無教会主義へと向かう上で重要なファクターであったのは確かである。しかし無教会主義の萌芽はもともと内村の信仰の中に含まれていたとも言える。内村の主張によれば、そもそも信仰とは基本的に個人的なものであり、人間はその一人一人の個人が、一対一の関係で神に向かい合わなければならないとされるからである。そしてその際、神と人間との間に別の人間が特権的に入りこむようなことがあつてはならない、と内村は考える。ゆえに無教会主義キリスト教では司祭にあたる職制をおかず、各信徒一人一人が神に従うことが求められるのである。もちろん内村によれば、教派教会においても本来は同じことが求められるはずである。内村が、必ずしも彼の教会観に同調しないものうちにもその賛同者を獲得し

内村鑑三における信仰と愛との関連(岩野)

てきたのは、信仰に関する彼の視点に当を得たところがあるからだとも言えるであろう。

しかし、キリスト教には同時に社会的な側面もある。そのように信仰が個人のものであるならば、それはイエスの社会的な教え、特に隣人愛に関する教えとどのように関連すると考えられるのだろうか。社会事業が宗教団体の目的となることに対しては強い警戒感を持つ内村において、両者はどう繋がるのか。あるいは、一方で人間の無力さ・愚かさに対して絶望的になりながらも、彼は何故最後まで社会に対する働きかけを続けたのであろうか。内村の墓碑には "For Japan, Japan for the world, the world for Christ, and all for God" と刻まれているが、個人の信仰がどのようにして宗教共同体さえ超えて、世界全体へと広がっていくのか。

筆者はこの問題に関して、これまで内村の贖罪信仰という観点、及び被造物としての人間の受動性と、受動的でありながらも切実に救済を求める人間の感受性に対する内村の信頼という観点から考察してきた。

内村は自らの贖罪信仰の確立を通して、人間が自らの罪ということに関しては全く無力であり、徹底的に神に依り頼むこと、⁽¹⁾ しか罪・罪悪感から救われる方法はないと考えるに至った。⁽²⁾ 内村によれば、この個人の罪悪感の根底には人間の原罪がある⁽³⁾ のであり、原罪とはすなわち神から離れたことである。それは神の似姿として創造された人間が、自らの能力を過信し誤用し

たことよつて生じたことであつた。しかし一方で、それゆゑに父なる神を慕ひ、神との正しい關係を取り戻したいと願う心も人間のうちに生ずることになる、と内村は主張する。そして内村は、そのような罪から逃れたいと切実に願う人間の感受性に一定の信頼を持ち、それゆゑ人間社会に向けての発信を続けたと考えられるのである。ゆゑに内村は個人主義と、單なる自己中心主義である自己主義とを厳しく區別している。内村の言う個人主義とは、我々は一人一人が神から使命を与えられたかけがえない存在であるがゆゑに、自分が個人として尊重されるのと同様、他の全ての個人もまた尊重されねばならない、というものである。

以上のことを踏まえた上で、本稿においては、そのような個人である人間がどのようにして隣人に対する愛を持ち得るのか、またキリスト教的な隣人愛を内村がどのようにとらえているか、ということを検討したい。内村鑑三と言へば、愛だけではなく義と愛の両方がキリスト教信仰において重要なのであつて、愛ばかりを強調するキリスト教理解は誤つてゐる、との主張をなした人物である。彼のキリスト教は「愛の宗教」という一般的なキリスト教のイメージと比較した場合、「厳しい」キリスト教であるとも考えられがちであらう。では、内村において、愛の概念はどのような意味を持つていたのであらうか。

イエスの教え、あるいは旧約からの律法に愛せよとの内容があるからそれを実行するのである、というのであれば、内村が

どのようにそれらの教え、律法を実感し、内村にとつてどのような意味があつたか、ということが問題になるであらう。もちろん、単に人間は社会の中で生きていくものであるから、という理由で、社会性を円滑なものにすべく隣人愛を持つのである、ということとは可能である。自己中心は結局自己を滅ぼすことになるからである。しかし内村は、人間が社会の中で生きる存在であるということと、キリスト者であるということとを結びつけて考えようとしていた。キリスト者が社会的マイノリティである日本社会において、キリスト教信仰と社会性との関連は当初より大きな問題であつた。これに対して、信仰を社会性から切り離して処理するという考え方も当時既に存在していた。例えば内村が不敬事件を起こした際、彼の一高の同僚には他にもキリスト者教員がいたのである。しかし彼らは当日欠勤するというやり方を選び、勅語とどう向き合うのか、という社会的・政治的問題を回避した。ところが内村はそのような立場をとらず、キリスト者としての自分と日本国民としての自分を関連付け、あるいは板挟みになつた結果、あのような行為に至つたのである。「二つの」¹⁾という発想も、宗教性と実社会でのあり方を繋げようとの態度があらわれたものである。このことからしても、内村は社会性に対するキリスト教的・聖書的な意味付けは必要である、と考えていたと思われる。

以上のような問題を明らかにすべく、以下では聖書に示される隣人愛と、個人的な愛、同情、共感といった感情について内

村がどのように解釈し考えているのかを、詳しく見ていきたい。具体的には、聖書における隣人愛、及び神の愛に関わる箇所についての内村の文章を題材として使用していくことにする。

内村の思想を探る手掛かりとして彼の聖書解釈を題材に用いるのは、それが内村の著作の大多数を占めるものであるからであり、その最大のインスピレーションであったからである。聖書の研究（聖書解釈）は彼の最大の作業である。彼は日本ではじめて聖書解釈ということを行つた人々の一人であり、日本における聖書研究の言わばパイオニアである。

なお内村自身は、聖句の意味をいかに理解すべきか、という一般的な意味で「解釈」という言葉を用いた例はあるものの、彼は自らの仕事を全体的に表す言葉としては基本的に「研究」を用いる。「聖書の研究」という表現は彼の渡米時代から既に見られるものであり、内村はアマースト大に在籍していた際、将来の目標として、日本において聖書の研究という事業を確立することを夢見ていたという。後に彼が創刊した『聖書之研究』誌の英語タイトルは「The Biblical Study」であり、研究とは study の和訳であるとも考えられる。study とは学び、研究し、検討し、調査することであり、研究対象の正体が何であるのか、を明らかにしようとすることであろう。内村は札幌農学校時代に自然科学的・実験的な学問研究の手法を身につけていたのだと、それを聖書という対象の研究に応用しようとしたのだとも考えられる。そうすると、「解釈」という表現に含まれる、自ら

の主観的な判断というニュアンスは内村にとって必ずしもふさわしくなかったのではないか。従つて、現代のキリスト教世界の用語として考えた場合には「聖書解釈」と呼んでも問題ないであろう作業を、内村は「聖書研究」と表現している、ということになるのである。

もちろん、内村による聖書解釈は、今日においても聖書註解として通用するものである、とは言い難いものである。聖書学的水準からいっても低いものであり、また彼が使用していた註解書類は当時においても既に古いタイプ、保守的なものであった。また現代言うところのポリテイカリー・コレクトかどうか、という点で問題があることも確かである。特にその男尊女卑的とも言えるあり方については、しばしば批判されている。

しかしここでは、聖書解釈そのものよりも、むしろその読み方に注意を促したく思う。ひとつは様々な現実的問題への解決・対処法を聖書の教えに求めるといふあり方であり、もうひとつはより具体的な読み方である。前者は、「日本の」「キリスト者」としてキリスト教による個人レベルからの社会改良を志していた内村にとっての基本的態度であり、このような現実の問題に則して読む読み方は現代の課題に対しても何らかのヒントとなるものである。田中正造は内村に対して古書を捨てて現実と戦えと述べたというが、内村はその戦うための知恵を聖書から得ようとしていたのである。内村が聖書を解釈した著作には、現実世界に直面した内村の主観的な思いや悩みが込められ

ている。聖書に何が書かれているかを字義的に明らかにすることが聖書解釈とするならば、それらは余計な要素であり、聖書解釈としての価値を落とすものであろう。しかし内村のキリスト思想を明らかにしようとする場合は、非常に重要な手掛かりなのである。

一方後者の具体的な読み方、内村による聖書読解の特徴は、全体性の強調にあると言える。内村は種々の文書を内包する聖書を、ひとまとめのものとして扱おうとする。それぞれの文書には時に相互矛盾するような記述もあるわけであるが、内村はそれらを分析的に合理化するよりも、敢えてそれらを一冊にまとめた編集意図に着目しようとするのである。本論で扱う愛というテーマについて述べるならば、福音書でイエスが教えた愛と、各々の書簡の著者が述べる愛とは、微妙な差異があるかもしれないが、内村はそれらを総合してキリスト教的な愛と考えようとする、ということになる。

一 よきサマリヤ人の話

まず入口として、「よきサマリヤ人の話」について、内村がどう解釈しているか確認することからはじめたい。恐らくイエスが隣人愛について語った譬話の中でも、もっとも著名なものだからである。一九〇八年の「善きサマリヤ人の話」と、一九二〇年の「善きサマリヤ人」のそれぞれから特徴的な言葉を引用

し、内村の解釈を確認してみることしよう。まず前者「善きサマリヤ人の話」からである。

○法学者は如何なる大事業を為したらんには其報賞ほうしょうとして永生を受くべきやと問ひました、イエスは之に對して「愛神愛人の普通道徳を行へ、然らば今より直に生くべし」と答へられました、……

○(サマリヤ人は、引用者註)之を見て憐み^①心動き、惻隱そくいんの情を発し、常時の人種の怨恨を忘れて ○「近より」祭司とレビの人が過行きたるに反して……己が驢馬に助け乗せ、旅館に携往きて介抱しました^②。

○「隣なる」では足りません、隣となりしであります、イエスの教訓は此一語に存して居るのであります、……○隣とは誰なる乎との學者の問に對して、イエスは隣となりしは誰なる乎と反問されました、……隣人とは我より進んで善を為して成る者であると、是れがイエスの隣人の定義でありました、彼より我に接近する者は隣人ではない、我より彼に援助を供して彼の隣人となるべきであるとのことでありました、……

一方後者「善きサマリヤ人」ではどうであらうか。

○隣人とは誰ぞ、同志とは誰ぞ、兄弟とは誰ぞ、必しも同国人ではない、必しも宗教家ではない、異邦異教の人なりと雖も、憫む人、愛の行為に出る人、其人は隣人であり、同志であり兄弟である、……

このように、隣人愛を働かせること、隣人となることは、義とされ永遠の命を得たいといった利己的な目的から為されるものではない、と内村は述べる。ここで内村が用いている「側隣の情」という表現は、意志的な主体性とは別に隣人愛それ自体に体がつき動かされている、といったニュアンスを含むものであると考えられる。「誰が隣人か」ではなく、自分から隣人とならねばならない、と内村が解釈していることは注目に値する。つまり内村によれば、「隣人愛」とは言うものの、それははじめから隣人であると認識される人間を愛するのではなく、その外側にある他者を敢えて隣人として扱おうとすることである、ということになると考えられる。確かに同胞・身内の人間に対して親切にすることはことさら特別なことではないであろう。では、この「愛する」とはどのような事態なのであろうか。愛とはどのようなものなのか。それらを明らかにすべく、続いては「愛」に関する内村の個人的な体験、内村による「愛」観、そして「愛する」ということに関するイエスの言葉と、それに対する内村の解釈を見てみたい。

二一 愛にまつわる内村の体験

まずは内村における「他者を愛する」という問題に関して、内村の個人的な体験を確認しておきたい。内村は青年期に渡米した当初、慈善事業に関わることが自らの救済にも繋がるかと考

え、障害者施設で介護人として働くことにした。この時点で内村は、他者を愛することによって、自らが義とされ救済される、と考えていたのである。しかし彼は、どんなに人のために働いても結局偽善にすぎないのではないかと、との罪悪感に苦しむようになる。

慈善の要求するものは完全な自己犠牲と全部的の自己没却であるが、余がその要求に自分自身を合致させようと努力するなかに、余の生来の利己心はそのあらゆる怖しい極悪の姿をもって余に現された、……

自分に対しても他者に対しても誠実であらうとした内村は、他者を愛することの裏に自己への愛が隠れていることに気づいた。そして彼はそれを許せなかったのである。彼をこの思いから解放したのは、贖罪信仰であり、アマースト大の総長シーリーによる、「自らの内に省みるのではなく、十字架の上ですべての罪を贖ったイエスを仰ぎ見よ」との導きであった。では、罪悪感から解放されたことで、他者を愛するということについての彼の考えはどのように変化したのであろうか。自己愛を捨ててただ他者を愛する、といったことが人間に可能なのか。続いてはその問題を、愛の性質に関する内村の見解から明らかにしたい。

二二二 「愛」の性質

以下に挙げるように、内村が愛について述べた言葉には、非常に興味深いものがある。

我れ若し人に愛せられんと欲せば我は人を愛するに若かず、そは我が与へし愛より以上の愛を我は人より受くること能はざればなり、斯くて我は人より我自身の愛を受くるに過ぎず、而かも我より出でし愛の一たび人を通過して我に還り来るや、我はその我より出でし元の愛にあらざるを知るなり、愛は貨幣の如し、人の手に渡りて利殖す、愛に乏しき者はこれを与へざる者なり、人より之を要求するに止て之を人に分与せざる者は、終に愛の守銭奴となりて愛の欠乏を以て滅びん。

或人神の愛に感じ、之に励まされて我を愛せり、我其人の愛に感じ、之に励まされて或る他の人を愛せり、彼また我愛に感じ、之に励まされて更らに或る他の人を愛せり、愛は波及す、延びて地の極に達し、世の終に至る、我も直に神に接し、其愛を我心に受けて、地に愛の波動を起さんかな。

人に愛情なしと言ふ勿れ、……我に愛情なきが故に人に愛情なきが如くに感ずるなり、我に愛情ありて世に愛情の充溢するを見るべし、我も願くは神より愛を賜はりて世を愛視して之を愛化せんことを。

以上より、内村が、愛は相互作用的に働くものであり、そしてその根源は神に求められると考えていることが判明する。

この、根源が神にあることは、「人間は自己愛を脱して他者を愛することができるのか」という問題に対する答えでもある。つまり、人間自身には他者を愛することはできないかもしれないが、神の愛を受け入れることにより、愛することができるようになるのである。また、神が人間を愛するように、愛は本来的に外に向かつて働くものであり、それが人間に与えられることにより人間もまた他者を愛するようになる。こうして人間相互に愛が作用しあうことになるのである。

ではこの神から与えられる愛と、内村を悩ませた自己愛とはどのような関係にあるのだろうか。一九一三年「愛の実行」より引用し、内村の考えを確認しておこう。

……我は又神の要求し給ふ愛の我れ則ち我肉に居らざるを知る、我は勿論或種の愛の我に在るを知る、我が家族を愛するの愛、貧者を憐み、弱者を労るの愛、則ち肉と情とに伴ふ愛の我にあるを知る、併しながら敵を愛するの愛、万物にまさりて神を愛するの愛、我身を十字架に釘けても人を救はんと欲するの愛の我が衷に在らざるを認む、我に在る愛は人の愛であつて神の愛でない、禽獣にもある愛であつてキリストに於て在つた愛ではない、我はキリストの愛を頌讚することは出来るが、之を實行することは出来ない。

併しながら我は信じてキリストを我が衷に迎へまつることが出来る、而して彼れ我が衷に宿り給ひて我を以て彼の愛を顕はし給ふ、我は自から愛を行ふことは出来ない、併しながら信じて愛の器となる事が出来る、……自分が愛するのではない、神が自分を以て愛し給ふのである、而かも神は其愛を自分の愛として認め給ふのである、而して人も亦其愛を我より出し愛として受取るのである、……

このように内村によれば、自己愛のように神から受け入れようとせずとも、もともと人間に備えられている愛もあるのである。ただし、そのような自己愛・自分の血縁者への愛は「肉と情とに伴ふ愛」「禽獸にも在る愛」なのである。内村は一九二五年「近代人の愛と基督信者の愛」の中では、「近代人の愛は恋愛である」「近代人は此愛即ち恋愛を至上善と見做すのである。故に彼等はソクラテスの如くに正義を愛する愛を以て燃えない」と嘆いており、このような情の愛は、広い社会性へと繋がるものではない、と内村が考えていることが明らかにされる。

よって、人間の内に在って愛の働きをなす神が必要なのである。だが人間の愛、情の愛に意味がないわけではない。神の愛を理解し受け入れるためにそれが必要であると考えられるからである。これについては後述することとして、ここでは先に引用した「善きサマリヤ人の話」で内村が、「側隠の情」という言葉を用いていたことに再度注目してみたい。

側隠の情という言葉はもちろん一般的に広く使われているも

のではあるが、やはり「孟子」での用例が連想されるのではないだろうか。「孟子」において述べられる側隠の情とは生まれつき人間に備わっている情であり、人間の意志や理性、あるいは打算とはまた別のところで働く情である。事実、「よきサマリヤ人」の譬話においても、原典では「はらわたから」の同情、という言葉が用いられているのである。はらわた、内臓は人間が自分の意志で自由にすることはできない部分であり、にもかかわらず意志とは別の次元で人間を突き動かす要素なのである。では何故そのような、意志により制御できない要素が人間には備わっているのか。キリスト教的な立場で解釈すると、神によりそのように創造されたからだ、と言えるだろう。さらに、人間は神に似せて創造されたと言われているので、人間は神より与えられた神の愛に似た愛（神の愛そのものではないにせよ）を持つている、と考えられるであろう。

続いては人間が受け入れるという神の愛について考察してみたい。先に、「他者を同胞のように扱う」のが隣人愛であることを確認した。一方でキリスト者は共同体内の同胞を「兄弟姉妹」と呼ぶ。つまり同胞を象徴的家族・血縁と捉えているのである。また創造主たる神は「父なる」神であり、これも象徴的な家族・血縁である。このように家族的に表される「父なる」神の愛とは、親が子を思う愛である、とも考えられる。

三 神の愛

内村は、神の愛、あるいは神は愛である、ということをごどのように解釈しているであらうか。ここではヨハネ第一書に関する解釈を見てみることにしよう。ヨハネ第一書には、まさに「神は愛である」との記述があるからである。一九一九年「神の愛」の中で、Iヨハネ四・七―一二について、内村は次のような説明をしている。

「我等互いに相愛すべし、愛は神より出づればなり」彼(ヨハネ書著者、引用者註)は先づ我等互に相愛すべしと言ひて基督者相互の愛に訴へた、然しながら基督者の愛の源泉は各自に又は此世に在るのではない、偽預言者は此世より出でし者なるが如く基督者は神より出でたる者である(五、六節)、而して神は愛である、故に基督者の愛は神より豊かに流れ出づるのである、基督者は自ら愛するに非ず、神に由て愛せしめらるゝなりとの意である、勸奨を為すと共に徳の源泉を指示したのである。

……実に神の生命、其根本中心が愛なるが故に愛する者のみ能く神を知る事が出来る、自ら愛せずして神を知らんと欲するも到底不可能である。

以上のように「神は愛である」とは、これまでも見てきた通り、愛という性質・働きが神にはあり、それが人間の愛の源泉である、と解釈されている。ゆえに、神がそうするように他を

愛そうとすることにより、神の性質を、そして神を知ることができるのである。ではその神の愛とはどのようなものであろうか。

……「神は其子即ち生み給へる独子を世に遣はし我等をして彼に由て命を得しむ、是に於て神の愛我等に顕はれたり」と、……世に貴き者にして子の如きはない、若し子の為ならんには全世界を棄つるも惜しからずとは凡て真実なる親心である、人は子を失うて其最も貴き者を失ふのである、然るに神は其子^{〔子〕}をも独子を棄て給へりと言ふ、而して之れ我等をして生命を獲得せしめんが為であると言ふ、犠牲の極致である、神の有し給ふ最高最大の愛の発現である、其深き意味は己が子を失ひし経験ある者にして初めて稍之を解する事が出来る。

このように、神の愛は独子イエス・キリストの犠牲により表現される、と内村は解釈する。自らにとつて最も大切なものとして「我が子」を挙げ、それを犠牲にするほどに神の愛が深い、ということなのである。しかも、独子を犠牲にしてまで人間を救わねばならない原因は人間の(そしてまさに内村自身の)罪にあるのであるから、内村は「驚くべきは神が愛すべからざる我等を愛し給ふ事である」「これ最も驚くべき愛である」と述べる。このような人間の罪を許す寛容さ、罪に苦しむ人間に対する同情、最も大事なものを投げ出すほどの無欲さ、エゴイズムの無さ、等を内村の考える神の愛の特徴として挙げる事ができ

きる。そしてかくも深い愛に對して、人間は感動し、感謝をおぼえずにはいられないはずである、と内村は考えるのである。

このように内村は、親子の愛を手掛かりとして神の愛の深さを説明するわけであるが、そのような子に對する親の愛とは、前述した如く「肉の愛」であるはずである。この肉の愛とのアナロジーによつて神の愛が理解できるということは、人間の（肉の）愛と神の愛との間には、働きとしては同質のものがある、ということになるであろう。故に、肉の愛、情的な愛はただ一方的に否定されるべきものとはならないのである。

この神の愛に對する応答は「神の愛を受け容れて他者を愛する」ことである、と内村は続ける。愛されることへの応答としては愛することがふさわしいであろうが、しかし現世に生きる人間は同じ現世にある者に對して具体的な愛を示すしかないのである。神の愛は神の中で完結せず、人間と世界の全てに向けられ、外へと働いている。ゆえに、人間の側でも心の中で神を愛していれば応答になる、ということにはならないのである。

……神は斯かる驚くべき愛を以て我等を愛し給へば我等は之に對して如何にすべき乎、「我等も亦神を愛すべし」である乎、否ヨハネは曰うた「我等も亦互に相愛すべし」と、神は惡むべき嫌ふべき罪人我等に對し神として用ゐる得べき最大の愛を以て愛し給うたのである、其の愛たるや余りに偉大にして我等は到底之に應ずる事が出来ない、勿論如何なる奉仕も祭事も以て之に酬ゆるに足りない、然らば如何

にせん乎、曰く兄弟を愛すべしである、兄弟互いに相愛する事之れ神の愛に對する我等の応酬である。

この考え方に基づいて、前述した内村自身の介護人体験について改めて考えてみると、結論としては、内村のしていたことは間違つていなかったということになるであろう。ただし愛による働きは、神の愛、救済への応答として為されるべきことであつて、愛による働きのものによつて神の愛を得たり、救済されたりすることができるといふ発想はあるべき姿とは逆になつていたのである。内村自身は根底に自己愛が潜んでいることを偽善であると感じたが、自己愛そのものに問題があるのではない。内村自身に満たされない、満たされたいという思いがあつたのは確かであり、それもまた悪いことではないであろう。しかしそれは内村自身が満たされることによつてしか満たされないものだったのであり、満たすのは彼自身ではなく神だったのである。人間は神によりたのむこと、つまり信仰によつてのみ満たされる。何故ならば満たされないことの原因は人間が神から離れたという罪にあるからである。そして満たされているとの確信を得た後に、他者を愛することによつて、神の愛に応答できるのである。愛するとは自分を愛するのと同じように同胞を愛することであり、隣人を愛するとは同胞という枠の外にある他者も同胞のように扱ふことである。それらは全て、神の愛に對する応答なのであり、そこに信仰と愛の関連があるのである。

まとめに代えて

信仰は個人のものであると内村は主張した。それは、自分の信仰、自分の罪、自分の救済とはまさに自分に関わることであり、神をおいては、自分以外の誰かによつてどうにかできるものではない、ということであつた。

しかしこの個人の信仰は、一方では社会性、公共性へと繋がつていくものなのである。信仰の対象である神は自分を超えている。その意味で神との関係がまず他との関係である。一般に社会性と言へばそれは人間対人間の関係が想定されるであらうが、その土台には神との関係があると内村は考えるのである。同じように、神の愛に対する応答は他者への愛であり、それは結果として社会的な働きへとつながる。社会的な問題と言うと不特定多数の一般市民を対象とするもののようにも感じられるであらう。しかし内村は隣人愛として、まず顔の見える同胞たち、及び身の回りのものたちに対する愛を實踐するように述べることであり、そしてその愛をその共同体の外側へも広げていくことで愛が社会へと広がっていくと考える。個人が共同体の外の他者を愛することは難しいことであり、そこには神の助けが不可欠なのである。

さらにこの愛の實踐は終末的な希望と重なるものである。人間は有限な存在であるがゆえに、人間の愛の働きは一人の人間のこの世での活動において完結するものではなく、展開、ある

いは変化しながら、受け継がれ、続くものなのである。そしてそのように変化し続けるものこそ生きているものなのであり、固定化したものは生命力を失つてしまう。ゆえに、信仰者が愛を實踐する場面でもある宗教共同体は、組織化されて固着されるべきではないと内村は考えたのである³³。神への応答までを信仰と考えれば、信仰は個人にとどまらず、他者への愛へと広がるものである。しかし共同体は、いつしか個人を押し潰す組織にもなりかねないからである。我々に与えられた今後の課題は、内村のこのような思想を、組織・集団を単に否定する論理ではなく、批判的に再構築する論理として展開することであるだろう。

註

引用文献は特に記されていない限り内村鑑三によるもの。内村の文章は「余は如何にして基督信徒となりし乎」を除き、『内村鑑三全集』岩波書店、一九八〇〜八四年刊（以下、『全集』と表記する）による。また漢字に付されたルビは、カギカッコなしが初出段階から付されたもの、カギカッコ入りが全集編集者により付されたものである。

(1) 例えば、『Religion Personal』宗教は個人的である「一九二二年、『全集』二七、七頁等で、個人の信仰という問題が扱われている。

(2) 内村が贖罪信仰を確立した過程に関しては、「クリスマス

夜話Ⅱ私の信仰の先生」一九二五年、『全集』二九、三三三頁等に詳しい。

(3) 人間の原罪に関しては、主に「創世記第一章第八章」一九〇〇〜〇三年、『全集』八、三三二〜四二八頁の記述を用いた。

(4) 罪悪感と信仰との関連については「羅馬書の研究」(一九二一〜二二年、『全集』二六に収録)の第十五講、第三十三講等に詳しく述べられている。

(5) 「個人主義と自己主義」一九二四年、『全集』二八、一六五頁等で内村はこの問題を扱っている。

(6) これについては小沢三郎「内村鑑三不敬事件」新教出版社、一九六一年、五七頁、六一頁、小原信「評伝 内村鑑三」中央公論社、一九七六年、一二二頁等に詳しい。

(7) なお内村のテキストに関しては、内村のキリスト教思想がある程度固まっていると考えられる明治後期から大正期にかけてのものを主に使用している。

(8) 「頌栄の辞」一九二五年、『全集』二九、二九一頁でそのように回顧している。

(9) 「聖書を棄てよと云ふ忠告に対して」一九〇二年、『全集』一〇、九六〜九七頁。

(10) 「善きサマリヤ人の話」一九〇八年、『全集』一五、四五七頁。

(11) 前掲書、四五九頁。

内村鑑三における信仰と愛との関連(岩野)

(12) 前掲書、四五九〜四六〇頁。

(13) 「善きサマリヤ人」一九二〇年、『全集』二五、五一二頁。

(14) ただし、他者を同胞のように扱うことが本当に他者を尊重したことになるのか、との問題は残る。自分とは違う他者、その自分との違いを認めたまま、同胞のように扱うことができるのであろうか。他者を他者のまま、さらに敵を敵のまま愛することはできるのだろうか、ということについてはさらなる検討が必要である。この問題については紙数の制限のため、今回は扱わず今後の課題とすることとする。

(15) 鈴木俊郎訳「余は如何にして基督信徒となりし乎」岩波文庫、一九三八年、一三一頁。

(16) 上掲書。

(17) 前掲「クリスマス夜話Ⅱ私の信仰の先生」、三四三頁。

(18) 「愛の利殖」一九〇三年、『全集』一一、二〇一〜二〇二頁。

(19) 「愛の波動」一九〇五年、『全集』一三、二〇三頁。

(20) 「愛情の充溢」一九〇七年、『全集』一五、七頁。

(21) とはいえ、自己愛などというものはそもそも本来の神から与えられた愛ではない、ということではない。イエスは最も重要な律法として「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして貴方の神である主を愛しなさい」を挙げ、次いで「隣人を自分のように愛しなさい」を挙げている。自分

を愛することが内村において否定されているわけではないであらう。

(22) 「愛の実行」一九一三年、『全集』二〇、七九頁。

(23) 「近代人の愛と基督信者の愛」一九二五年、『全集』二九、二一〇頁。

(24) 孟子については貝塚茂樹編『世界の名著』3 孔子 孟子 中央公論社、一九六六年を用いた。

(25) 例えば新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店刊、二〇〇四年のルカによる福音書では、「腸のちぎれる想い」と訳されている(佐藤研訳)。

(26) なお、若干横道へそれることにはなるが、「父なる神」に関する内村の独特な見解についてここで紹介しておきたい。一九一三年の「神の慈愛に関する聖書の言辭」の中で内村は以下のような注目すべき記述をしている。

父の愛は深くある、母の愛は強くある、故に神の愛の深度に就ては之を父の愛に比べて語るべく、其強度に就ては之を母の愛に較べて伝ふべきである、神は人の父であり又母である……「エホバは嫉妬む神なれば」とあるは彼の愛の女性的反面を称ふたのである、……「神の慈愛に関する聖書の言辭」一九一三年、『全集』二〇、六四頁。

……神の代表者として預言者エレミヤを見よ、預言者ホゼアを見よ、彼等は女性的預言者であつて、能く神

の女性的反面を表はす者である、……然りエホバは婦人の熱情を以て我等を愛し給ふ、……(前掲書、六五頁)。

若し聖書全体が示す神の性格に由り彼に名を附しまつるべしとならば、彼を呼びまつるに方て「天に在す我等の母よ」と云ふが「父よ」と云ふよりも遙かに真理に近くあると思ふ(前掲書、六六頁)。

内村の思想に武士道的(すなわち儒教的と言つても差し支えないであらう)な側面があることは彼自身もむしろ進んでみとめることであり、ゆえに彼の思想は男尊女卑的であるとの批判を受けることもある。実際女性の社会進出といったことに関して決して進歩的とは言えない人物であり、例えば彼に続く無教会主義キリスト教の指導者には、他の教派と比較しても女性が少ないとも言われる(例えばマーク・R・マリンス『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』高崎恵訳、トランスビュー、二〇〇五年、九一頁を参照)。しかし一方で、このように「父なる神」といった表現をそのまま字義通りにとり父権的に解釈しようとはしない誠実さをも備えていたことは記憶されてよい。

(27) 内村はヨハネ第一書について、この書簡が書かれた背景にはグノーシス主義への反論があり、このことを理解しておくことがこの書簡を理解する助けになるとして、以下のように註釈している。

神に由て生れ且神を知る者は哲学者ではない神祕家ではない、……ヨハネは言うた「それは義を行ふ者である、兄弟を愛する者である、而して又イエスキリストの肉体となりて来り給へる事を信ずる者である、……」〔神の愛〕一九一九年、『全集』二五、五三頁。

(28) 前掲「神の愛」、五四頁。

(29) 前掲書、五五頁。

(30) 同前。

(31) 同前。

(32) 同前。

(33) 前掲書、五六頁。

(34) 内村の教会論については今回は紙数の制限で扱っていないが、例えば「無教会主義の前進」一九〇七年、『全集』一四、四八九頁には「教会は生物の体軀からだと均しく永久に壊れて永久に築くべき者である」との表現がある。